

死蔵品の所有状況に影響をおよぼす要因

大阪樟蔭女大 一棟宏子 ○本田 節

目的；家庭にはまだ使えるものが多く死蔵され，生活スペースの相当部分を占めている．その意味で，死蔵品の活用は，住宅計画につながる大切なポイントといえる．本研究は，各家庭が現在かかえている死蔵品の実情を把握し，〈死蔵品を活用するうえで現在ネックになっている点は何か〉を明確にすることにより，その活用システムについて考察する．本報では死蔵品の所有状況を報告し，それに影響をおよぼす要因について検討する．

方法；1988年7月，公団賃貸住宅（東大阪市，3DK・58.27㎡）居住世帯と高校生（生駒市）・大学生（東大阪市）の子供をもつ家庭，合計801世帯を対象に調査を実施し，692世帯の有効回答を得た（回収率87％）．

結果；①〈死蔵品〉および〈死蔵品予備軍〉とみなされるモノは，それぞれ全世帯の約6割が所有している．〈使うあてがなく処分するつもりのもの〉は，「古くなった」「使うチャンスがない」等の理由から，衣類・身のまわり品をはじめ，家具類，電化製品，台所用品，冷暖房用品に多い．〈使うあてはないが，処分するには惜しいもの〉は，「もったいないから」「未使用または新品同様だから」「高価である」「思い出の品だから」等の理由で，電化製品が最も多く，次いで，衣類・身のまわり品，台所用品，家具類の順に続いている．〈処分するつもりのもの〉とくらべると，「もらったもの」と「新品・新品同様」のものがやや多い．②死蔵品の所有状況については，居住年数，転居経験，住宅の所有関係，住宅形態，延床面積，ライフステージ，主婦の就職状況の各要因に有意差が認められ，影響をおよぼしていることがわかる．